

# 一〇〇 羊の皮を被た狼

あるところで、一匹の狼が羊の皮を被て、羊の牧場に行き、多くの羊と一緒になつて羊の餌を食ひ、素知らぬ顔をして居ります。牧夫はそれとは知らず、夕方になつたから、羊を檻の中へ追ひ込みまして錠をば締めて了いましたから、狼は出ることが能なくなつたが、明日も亦た羊の餌を食ひ、働かずに暮さうと考へて、寝て了つたのでありません。

ところが牧夫は、明日食肉が無くなりましたから、夜になつてから羊を一匹取りに参り、何の氣も付かずに、羊の皮を被てゐる狼を見まして

『こいつが太つてゐて甘味さうだ。』

と云つて、其の場で打ち殺して了ひました。

△狡猾いことを爲て世を渡らうとすると、人でも此の狼のやうな目に遇ふものであります。

# 一〇一 賣卜者

或る賣卜者が、何時も行く大道へ出て、他の身の上を卜つて居ります所へ、知人が大急ぎで駈けて來て

『オイ君、今君のところへ行くと、表の戸が破れてゐるから、變だと思つて覗いて見ると、何うも盜賊が入つた様子だせ。』



と知らせて呉れましたので、賣卜者は喫驚して手に持つてゐた筮竹も其處らに投げ出し、算木も机も其の儘にして、大急ぎで我家へ歸つて見ますと、早や近所の人達が立つてゐて  
『先生遅かつたよ。先生は他の身の上を占ひながら、自分の身の上  
が知れぬとは何うしたんだね。』  
と云つたと云ふことであります。

△賣卜者身の上知らずとは能く云ふたことであります。

### 一〇二 野牛と山羊

獅子に追蒐けられた野牛が、道の曲り角でヒヨイと獅子をはづし山羊の棲んでゐる洞穴の中へ逃込むと、山羊は腹を立て

『僕の所だから入つちや不可いよ。』

と云つて、角で突き出さうとしますから、野牛は小聲で

『君は不深切な奴だ。勝手に苛め給へ、君が那麼にするのを僕が我慢を爲て居る理由は、何も君が畏ろしくするのぢや無いよ、彼の獅子が通り過ぎたら、君が強いか僕が強いか知れるんだ。』

と申したと云ふことであります。

△朋友が困つてゐるのに付込んで、自分が儲けやうなんてするのは宜しく無いことであります。



103 衰へた獅子

或る獅子が次第年を取つて、歩くことも能なくなり、今は死ぬのを待つばかりになりましたところが、誰も介抱をして呉れるものありませんので、苦しい息を吐きながら、地面の上にへたばつて居りました。すると野猪が通り蒐つて

『以前に俺を苛めたから、其の恨を返してやるぞ。』

と云ひながら、鋭い牙で以て横腹をばグサリと突き刺してゐるところへ、又た一匹の野牛が出て来て

『俺も恨があるから斯うして呉れる。』

と云ひながら、角で以てグサリくと突きました。此のやうにされても、獅子は何ともすることも能ず、殘念ながら手向せず居りますと、それを見てゐた驢馬が

『彼の様子では、俺が行つて苛めても、何とも爲ることは到底も能ないに相違ない。』

と思ひましたから、近寄つて獅子の顔を踏んだり蹴たりして、散ざんに苛めると、死にかゝつた獅子は苦さに唸りながら

『強いものに莫迦にされるのなら、未だ我慢もできるが、汝のやうな弱いものに、此のやうな目に逢ふかと思ふと、俺は殘念で死んでも死に切れぬわい。』



と齒齧みをして残念がつたと云ふことであります。

△若い時に他を苛めると、必ず後に報るが来るものです。

### 一〇四 山羊と狼

或る狼が、崖の上に草を食つてゐる山羊を見付け、取つて食はうと思ひますけれども、切り立つたやうな崖になつてゐるので、自分で行くことができませんから、山羊を呼寄せて食はうと思ひ

『オイ山羊さん、そんなところにゐて、若しか轉がり落ちるやうなことがあると大變だせ、茲に君の食るのに極良い草が澤山あるから、降りて来て食る方が安心だせ。』

と云ひますと、山羊は上から大きな聲で

『否や狼君、君は親切にさう云つて呉れるが、まア君の侷めは御免を蒙ることに爲やう、何故かつて君の親切は僕に親切なのでは無くて、君自分が御馳走に有り付かうと云ふ親切であると云ふことはチャンと知れてゐるよ。』

と云つて、相手にならなかつたと云ふことであります。

△一寸来いに油断すなど云ふことがあります。

### 一〇五 海岸の旅人

二三人の旅人が海邊を通り、少し小高い岩に腰を掛けて沖の方を



見て居りますと、遙彼方の方に何か浮んでゐるので、一人が  
「彼れは大きな船に違ひ無い、港へ入るまで見てゐやう。」  
と云ふと、皆も

「なるほど大きな船だ。面白いから見に行かう。」

と云つて見てゐると、何うも大船では無く、小さな船のやうに見えま  
したが、それでも見て居ります、とやがてのことに近寄つて來まし  
たから能く見ると、大船でも小船でもなく、唯だ一把の藁であつて  
難なく岸へ打ち上げられたから、皆は大笑ひを爲しました。  
△物は見やうによつて、諸種に見ゆるものです。

一〇六 野猪と狐

一頭の野猪が、偶ある樹の根で、一生懸命に牙を磨いでゐますと  
ころへ狐が出て來て

「オイ野猪君、君は何を爲てゐるのだね、獵夫も獵犬もそこらに見  
えないのに大層働くぢや無いか。」

と申しますると、野猪は回顧つて

「狐君にも似合んことを云ふね、なるほど獵夫も獵犬も見えないけ  
れども、騒動が始まつてからは、他にせねばならぬ諸種の用事が  
あるから、僕は牙を磨いてゐる暇が無いゆゑ、今のうちに磨いて  
置くのだよ。」



と云つたので、さすがの狐も一言なかつたと云ふことであります。  
△敵を見て矢を矧いでゐては戦の間に合ひません。

### 一〇七 狼と羊の番犬

或る日多くの狼が集りまして

『此の山の裾にある牧場には、旨さうな羊が澤山あるけれども、犬めが番を爲てゐて、俺達が近付くと直に吠て人間に知らせるから何うしても奪ることが能ぬ、何か可い工夫はあるまいか。』  
と申しますると、常から仲間で智者と云はれてゐる狼が進んで出まして

『それは角別難かしいことは無い、然し乃公だけでは何うも仕方がないから、旨く騙して乃公が犬を連れて来るゆゑ、諸君は待受けてゐて犬を噛殺して呉れ給へ、犬さへ居なければ後は何うしてでも羊は奪れるからね。』

と申しますると、他の狼たちは大いに喜んで

『諾矣、承知した。例の洞穴の中に待つて居るから、君は犬を連れて来て呉れ給へ。』

と云つて、皆は洞穴の中へと隠れました。智者のある狼は直に用意を爲て山を降り、犬のところへ参り、遠くから

『僕は羊を奪りに来たのぢや無いよ、少し犬君に用事が在つて来た



のだから、氣の毒だが犬君一寸此處まで来て呉れ給へな。」  
 と云ひますと、犬は何の氣も付かず傍へ参りました。すると狼は  
 「談話と云ふのは他でもないが、僕は何うも君の氣が知れないから  
 それを訊かうと思ふんだ。全体君と僕たちとは、軀形から何から  
 総てが同じやうにできて居るのに、何故僕等と兄弟になつて仲善  
 く遊ばないのだらう。君は僕達の一番嫌ひな束縛を受けてゐる自  
 由に何處へでも歩いて行くことが出来ないのに、それで満足してゐ  
 る氣が知れないよ。さして強いことも無い人間に頭を下げ、尻尾  
 を振つて喜んでゐるぢやないか君は。そればかりでなく、人間の  
 甜め緯の骨や残り飯を貰つて不平も云はず、眞個に意久地が無さ

過ぎるぢやないか。若し君が僕等の仲間入するならば、それは君取  
 りたてのホヤ／＼の肉を腹一杯食ることが能るし、遊びたい時に  
 は勝手に遊べるんだ。何うだこれから一緒に來ては。」  
 と辯に任せて説ま立てますと、犬は耳を傾けて聞いてゐたが、なる  
 ほど狼が云ふことが尤もでありますから  
 「いかにも君の云はれることは道理に合つてゐるやうに思ふ。それ  
 では今から一緒に行くから、案内して下さい。」  
 と云つて、一緒に参るのでありました。狼は心の中に喜び、悟られ  
 ぬやうに諸種な談話を爲ながら洞穴へ着くと、待ち構へてゐた多く  
 の狼が飛び蒐り、犬をば喰ひ殺し、直に山を降りて行つて、羊を鱈



腹食たと云ふことではありません

△迂濶他の言葉を信ずるものではありません。

一〇八 鴉と神様

或る鴉が餌を漁つてゐるうちに、思はず畏に懸り、逃げやうと藻掻きました。が、何うしても身動きさへも出来ませぬので、神様に「何うかお助け下さいませ、此の大難を救ふて下さつたならば、必ず良い香をお供いたします。」

とお祈ると、直に効顯があつて追れることが出来ました。然しながら鴉は、神様への約束の香を供することは爲ませなんだ、すると又

た他の畏に直ぐ懸りましたが、以前の神様には未だ香を供てありませんから、お願ひしたところで、お救ひ下さらないであらうと思ひ今度は他の神様にお願ひしたのです。すると直に現れられて

「コラ、汝は不都合な鴉だぞ。先刻約束を爲ながら、何故約束の通りに香を供へない。知らぬと思つて居るだらうけれど、其のやうなことは皆知つて居るぞ。汝の云ふことは信用できないわ。」と云つてお助けになりませんでした。

△一度約束を破つたものは、其の後何のやうに確な約束を致しましても、誰も信用する人はありません。



一〇九 騎馬武者

むかし或る國に、一人の武士がありまして、折から戦争が始つてゐたものでありましたから、太く肥た馬に乗り、戦争に出て大層手柄を現し、これも此の馬が助けて呉れるからだと思ひ、澤山秣を與つたり、毛を梳つてやつたりして可愛がつてやりました。

する中に戦争が濟んで、世の中が穩かになりましたから、お家へ歸りました。斯うなると俄に馬の飼方が悪くなり、秣も粗末なものばかりを食させ、荒い仕事に酷き使ひます。半年ばかり其のやうにしてゐると、又たもや戦争が起つたから、馬をば既から曳き出し、

立派な鞍を置いて自分も重い鎧や甲をば着け、ゆらりとばかりに打ち跨つて、一鞭あてゝ駈けさせますと、馬は直に足を折つて倒れたものですから、主人は眞つ倒れに投げ出されました。馬は痛さを覚えて漸くのことに起き

「旦那さま、貴方は最う歩いて戦にお出なさいませ。何故かと云つて貴方は私を乗馬から駄馬に爲てお了ひになりました。」

と云つて恨めしさうな顔を爲ましたと云ふことであります

△千里を走る馬でも、使ひやうで驚馬にも劣るやうになるものでござります。



一一〇 鳥と羊

ある鴉が、羊の脊中にとまりましたが、それを兎や斯う云ふのは面倒でありますから、羊は鴉の爲る儘に爲て、彼方こちらと歩き廻つて居りましたが、中々飛び去りさうにも無いから

「オイ鴉さん、最うよいかげんに飛ばないか、僕だから斯うして黙つて居るけれども、若し犬君にでも此のやうなことを爲て見給へそれこそ直に噛殺されるせ。」と申しますると、鳥は

「ハ、ハ、そんなことは云はれなくつてもチャンと知つてゐるよ乃公は誰は馬鹿にしても怒らない、誰には阿諛をしなけりやならないと云ふことを知つてゐるんだ。」

と云ひました。

△何事を爲るにも、相手を見てするのが肝腎であります。

一一一 駱駝と歳神

一頭の駱駝が、途中で野牛に出會ひますと、如何にも強さうな角を持つてゐるから、大層羨ましくなり、或る日歳神様に會ひました時に

「他の獣には、勇ましくて又た強さうな角を授け給ふたのに、僕には何うしてお授け下さいませぬのですか。」  
と恨めしさうに申しますと歳神様は大いに怒られ



「其の方には、大きくて強い軀を授けてあるに、それが不足で角を授けて呉れよとは實に不埒千万である。」  
と仰せられ、願ひを許されぬばかりでなく、耳を少しばかりお取上げになつたと云ふことであります。

△あるが上に無理を望むと、反つて失ふものです。

### 一〇二 仔山羊と狼

屋根の上の上つてゐた仔山羊が、不斗下を見おろしますと、一頭の狼が徐々と歩いて來ましたから

「ヤアイ狼の馬鹿野郎、汝なんか些少も怖くは無いぞ、何だ食ふ物

が無いか知らんが、瘠ッぼけて其の不景氣の面は何だ。」

と悪口を云ひますと狼は立止つて睨み上げ

「何を悪口云つてるんだ此の卑怯者め、汝が強いのでなく汝が居る

所がよいから那麼ことが云へるのだぞ。」

と云つたと云ふことであります。

△他の威光を藉りて無法なことを爲るものは、丁度此の仔山羊のやうに卑怯なものであります

### 一一三 犬と秣槽

或る犬が秣槽の中に臥て居りますと、其處へ二三頭の馬が、其の



秣を食はうと思つて來ますと、それを見た犬は、傍へ寄付けまいと大きな聲を出して吠え、若しそれでも寄つて來たならば、噛付くやうな氣勢を示せますと一匹の馬は腹を立て、  
『何だ此の罰當りめ、秣なんか犬に喰へも爲ないくせに、俺にまで喰せないとは餘程の呆だ。』  
と申しましたと云ふことであります。

△此の犬のやうな意地悪が、よく世間にあるものです。

### 一一四 馬鹿な高慢

ながいこと外國へ參つてゐた男が、久しぶりで歸つて參りまして

旅を爲てゐる中の彼方こちらでの自慢ばなしを始め、

『倍て其の次には僕がローズと云ふところに泊つてゐた時のことであるが、合宿のものと飛び競をすることになり、中には二三間くらゐ飛ぶものがあつたが、それ等が巧い中だつた。ところで僕の番になつたから、ウンと斯う体を構へて、ヤツとばかりに飛んだところが、確に八間飛べたね。さうすると見てゐる人は呆れて了つて、褒めることも急には出來ない、物の五分間もしてから、思ひ出したやうに手を拍つて褒め、中には抱き付いて接吻した婦人もあつたよ。これは決して嘘では無く、ローズへ行つて聞いて見給へ、澤山證據人があるから。』



と云ひますと、其の談話を聞いてゐた一人が笑ひながら  
『それは實際君のお話の通りだらう。然し唯だ口ばかりでは眞實と  
思はない人も、中にはあるかも知れないから、此處をローズとし  
て、一つ飛んで見せ給へ。』  
と云ひますと、其の男は言葉を紛らして、他のことを申したと云ふ  
ことであります。

△何事でも、論より證據であります。

一一五 鷺と狐

或る鷺と狐とが、何時の程にか親しくなり、お互に近所に住まう

と云ふ相談ができましたして、或る大きな木の枝に鷺は巢をかけ、狐は  
其の根のところにある洞穴に棲むことになりました。而してお互に  
仲善くしてゐるうちに、狐はお産をして、可愛い小供が生れたので  
ありました。

そこで狐は小供に食さす餌を、毎日探しに出るので、留守を鷺に  
頼んで置くのが常でありました。或る日のことに鷺は自分で餌を探  
しに出るのが嫌で仕方がありませんから、惰けて枝に止まつて居り  
ましたが、正午ころとなつてお腹が減いて來ましたので、不斗悪い  
心を起して 親狐の留守なのを幸ひに、根のところへ降りて行つて  
仔狐を掠つて巢に歸り、悉皆食て了ひました。



可愛い小供が鷲に喰はれたとは少しも知らず、今日は良い餌を探し當たから、早く喜ぶ小供を見やうと、欣然として歸つて見ますことあはれや鷲に喰はれて了つた後でしたから、親狐は泣いて怒りましたたが、鷲は高い木の上にあることでもありますから、木に攀れぬ身は何とも致し方なく、恨を呑んで棲の中へ入り、何うかして復讐を爲やうと考へた末、折よく近所の神社へ、村の人が山羊の肉を供へたことを思ひ出しましたから、竊と神社へ行つて、其の山羊の肉を少しばかりと、供へてある燈明とを啣へて来て、下から木に火を點けますと、炎々と燃え上つて、丁度癩つたばかりの鷲の雛の巢に火が付き、落ちて来たところを待受けて、親鷲が空から見てる前で食

了しひ、首尾よく仇を討つたのでありました。

△上に立つものが無法をする時、下のものは屹度復讐を爲るものであります。

### 一二六 小供と蟲螽と蠍

ある夏のことではありますが、小供が蟲螽を捕つて、澤山手に持つて居りまして、又た不斗蠍を見付け、これも同じく蟲螽だと思ひましたから、手を廻して捕らうとしますと、蠍はそれを見て尻の劍をば振りながら

「坊ちやん、サア捕つて下さい、貴方が私をお捕へになつたら、直



に放さなくちやならないやうにしてあげます。放す時には唯だ私  
だけでなく、其の蟲益も一緒に放させますよ。』  
と云つたと云ふことであります。

△無事の時に、澤山なお金をかけて兵隊を準備して置くのは、つ  
まらぬやうであります。若し事のある時には、常の損をば十  
分に償ふことができるものです。

### 一一七 兎の喜

或るところで、王様と崇められてゐる獅子は、まことに温順しく  
て部下の獸どもを可愛がり、少しも無法なことを爲ませぬから、一

同は大層喜んで居りましたが、或の日のことに王様から

『少し申し渡したいことがあるから来るやうに。』

と云つて來ましたから、何事かと思つて狼も、仔山羊も、豹も虎も  
鹿も犬も兎も出て参りますと

『今までは、兎角同じ獸同志でありながら、よく喧嘩を爲ると云ふ  
ことを聞いたが、今日からは決して強いものが弱い者を苛めるや  
うなことなく、互に仲善暮すやうに、因く約束を致せ。』

と云ひ渡されたのであります。そこで皆は其の通りに互に約束を  
結びましたが、此の時兎は大喜びで

『私どもは何んて感應嬉しい有り難い代に生れたのだらう。私ども



のやうに弱い者でも、強い方の傍にゐても、少しも恐れなくても  
宜いことになつたとは實に嬉しい。』  
と長い耳をピコ／＼させながら喜びました。

△弱い者も強い者も権利は同じことでもあります。

一一八 一二つの袋

或る古い言葉に

『人は誰でも二個の袋を首にかけて生れるものだ。』  
と云ふことがありますが、其の袋の中には、何が入れてあるかと聞  
いて見ますと、一個の袋には、近所の人々が爲た過が入れてあつて夫

が頸の前の方にかけてある。又た他の一個には、自分で爲た過が入  
れてあつて、これは頸の後の方に懸けてあるのです、それであるか  
ら、近所の人々の爲た過失はよく見へるし、自分の爲た過失は見へな  
いのであります。

△他の過失を彼此評判するよりは、自分に過失が無いやうにする  
のが肝腎であります。

一一九 犬と兎

或る犬が、小山のところで一匹の兎を捕へ、既に喰はうとしまし



だが、イヤ〜これは友達にして、遊ぶ方が楽しからうと思ひましたから、急に優しい言葉をかけてやりますと、兎は  
「犬さん、何うか汝の眞個の心をあらはして下さいませ、汝は私の敵のやうでもあるし、又たお友達のやうにも見えまして、私には何うも汝の本心が解りませんから、少しも安心することが出来ないのであります。」

と云つたと云ふことであります。

△よく心の變る人には、少しも油斷ができません。

### 一一〇 獅子の嘆

ある廣い野原で、野牛が獅子の仔が寐てゐるのを見付け

「こいつを無事に大きくさしたら、又た恐ろしい敵が頭増ると云ふものだ、今の中に殺してやらう。」

と云ひながら、鋭い角で以て突殺し、急いで其の場を立去つたのでありました。其の後へ女獅子が歸つて来て、可愛い我が子が殺されて居りますので喫驚して

「噫、一寸油斷したばかりで、野牛めに酷いことをされた。」

と云つて嘆き悲んで居りました。すると遠くから此の有様を見て居りました獵夫が

「オイ〜女獅子、汝はそれ位のことは當然だよ。世の中には汝の



爲めに兒を取殺されて、悲んでゐるものが幾人あるか考へて見るが宜からう。』

と云つたと云ふことであります。

△人を取殺すほどの擻猛しい獣でも、我が子を失つたときには悲がるものです。

一一一 蟹と狐

或る蟹が、永く住みなれた海濱を見捨て、少し隔れたところにある牧場へ行き、柔かな草の上に鉄を休ませて

『これからは此處を住家にすることに爲やう。』

と獨語を云つて居りますところへ、一匹の狐が通も蒐り、不斗蟹を見付けまして

『何うも此の邊で見なれない變挺なものだぞ。然し饑い時には不味

いものなしと云ふから、ドシ食つてやらうか。』

と云ひながら口を出しますと、蟹は悲しげな聲を出し

『嗚呼、俺は何うしても狐に食はれなくてはならないのか、然し考

へて見ると斯うなるのも當然だ。自分の性質と云ひ習慣と云ひ海

邊に居るやうに出来てゐるものを、何故恁麼陸の方に住む氣にな

つたのか、自分ながら譯が解らない。』

と云つて嘆いたが追付かず、遂う食はれて丁ひました。



△何事も、身に相應はない望を起すと身を滅します。

一一二 牧羊者と狼

羊を飼つてある牧場の近所を、年久しく徘徊してゐる狼がありましたが、少も羊に目を付けて捕らうと云ふ様子が無く、まことに温順しい正直者のやうに見へましたが、牧羊者は少しも油断を爲させませんでした。

ところが月日が経つに従つて、羊とお友達みたやうになりましたから、牧羊者は彼を敵だと思ふのは、此方の僻み心か知らんと思ふやうになりました。或る日のことに牧羊者は、己を得ぬ用事で、是

非とも自分で町へ用達に行かねばならぬことになりましたから狼の來たのを幸ひに

『何うか今日だけ羊の番を爲てゐて呉れませんか。』

と頼むと、狼は快く

『承知しました、御緩乎行つていらつしやい。』

と云つて呉れましたから、牧羊者は安心を爲て町へと行つたのでありました。

急いで用を済まし、歸つて来て見ますと、狼はゐませんで、羊は大半喰ひ殺されて了つてゐるので、牧羊者は大いに驚いたが『嗚呼俺は何て莫迦者だらう。狼なんか番付を頼む法はあるもの



で無かつたに。」

と云つて後悔を爲たと云ふことであります。

△極親しく爲てゐる人の中にも、敵のやうな心を持つてゐるものがあるから、決して油断は能ません。

一一三 鴉と蛇

或る鴉が、お腹が減いてなりませんから、何か食るものは無いかと、木の枝から下を眺めてゐますと、日向ぼつこを爲て蟠を巻いて寝てゐる蛇があるのを見付け、直に飛び下りて攫掠はうとしますと蛇は目を覺して

「誰だ俺を喫驚させるものは。」

と云つて鎌首をあげ、自分を喰はうと爲てゐる鴉を見るなり、くるくると巻いて強く締めましたから、鴉は息も絶え／＼になり

「俺は生る爲めに汝を喰はうと爲たのに、それが基で反つて殺されるとは、恚麼不幸なことは無い。」

と云つて嘆いたが、遂う殺されて了ひました。

△一時の慾から身を亡すことがあるから、よく氣を付けて物事をせねばなりません。

一一四

盜賊と鶏



ひとり 一人の盜賊が或る家へ忍び込み、そこらあたりを探しましたところ  
ろが、取るやうな物が一個もありませんので  
『何と云ふ貧乏な家だらう。それにしても何か一品くらゐは在りさ  
うなものだ。』

と云つて、方々探した上句、漸くのことで鶏を見付け、せめてこれ  
でも持つて歸らうと、音せぬやうに盗み取り、己の家へ歸つてから  
腹が減いて來ましたから、其の鶏を料理しやうとすると、鶏は  
『私は人間の爲めに益にたつもので、朝早く私が起きて鳴きますか  
ら、人間は目を覺して仕事に懸るので、決して殺されるやうな悪  
いことは致しませぬ。』

と云ひますと、盜賊は猶ほ手を緩めず  
『それだから俺は汝を殺すのだ、汝が人の目を覺させると、俺は仕  
事を止めねばならなくなるのだ。』  
と云つて、遂う殺して了つたのであります。  
△善い事を爲る人の防禦になるものは、悪いことを爲る者の爲め  
には敵であります。

一二五 猫と愛神

或る牝猫が、何うかして人間に化りたいと思ひ、猫の愛神のそこ  
ろへ参りました



「實に無理なお願でございますが、何うか妾を人間に化らして下さ

いませ。」

とお願ひを爲ますと、愛神も憐れと思召して、其の願を許されますと、猫はまことに美しい娘になることができまして、其の舉動もまことに優しい行ひでありましたから、愛神も大いに喜ばれて居りましたが、其の食物も亦た人間の通りになつたか何うかを試して見やうと、一匹の鼠を部屋の中へ追入れられると、今まで美しい娘であつたものが俄に猫の本性を出して、其の鼠を捕へやうとしますから、これを御覽になつた愛神は

「形だけ人間になつたところで、其の心が人間の通りにならぬもの

は駄目だ。」

と仰有つて、又た元の猫に戻されたと云ふことであります。

△外見は優しく見へても、心は猫のやうな人が澤山あります。

### 一一六 猫と鳥

或る鳥が病氣になつて、籠の中で苦しんでゐますと、其處へ猫が醫師の服装を爲て洋杖を突き、療治箱を小猫に持たせて参り、病氣の鳥を世話してゐる鳥に向ひ

「貴方は嘸御心配なことでございませう、誰か良いお醫師に見せな

さつたかね。若し未だならば、私が樂の指揮を爲て、直に癒して



あげますから、決して御遠慮なく仰有いませ。』  
と親切げに申しますると、鳥は

『まことに御心切の段は有り難うございます。然し私を始めとして  
病鳥も、貴方がお構ひ下さらぬのが一番好うございます。』  
と云つて追ひかへしました。

△此方の不幸福は敵の幸福となるものです。

### 二二七 鹿と羊と狼

或る時鹿が羊に向ひまして

『羊さん、まことに申しかねることですが、麥を一升お貸し下さい

ませんか、最も證據には狼君を頼みますから。』  
と云ひますと、羊は若したばからればせぬかと、暫くの間考へて居  
りましたが、やがてのことに

『お氣の毒ですが、まアお断りすることに致しませう。何も惜んで  
お断りする譯ではありませんが、よく考へて見ますと、第一證獸  
に立つ狼は、自分で物の要る時には、何のやうに他が大切にして  
あるものでも、何の断りもなく搔掠つて行く、風の宜しく無いも  
のだし、また君にしたところで、競走を爲たならば、僕には到底  
も勝つことが出来ない。してみると返す時が來ても君も狼も僕の手  
には合はいからなア。』



と云つて貸しませんでした。

△黒いものが二つ集つても、白い物にはなりません。

一二八 雀と兎

或る時一頭の兎が、鷲に攫まれて苦しんで泣いてゐますと、それを見た雀は馬鹿にして

「オイ兎君、君は日頃走ることが疾いつて自慢してゐたが、餘り疾くも無いと見へて取捕つたぢやないか。」

と云つて笑つて居りをすと、油断を見すました鷹が飛んで参り、何の苦もなく雀を鋭い爪で引握みました、する途端に、何うした拍子

であつたか、兎は鷲の爪を追れて、危い生命を拾ひましたから、溜息を吐きながら

「彼の雀め。俺が難儀を爲てゐるのを見て、雀躍して喜んでゐたから、彼の通りの目に逢ふのも當然だ。」

と云つて、巢へ歸つたと云ふことであります。

△他の難儀を爲てゐるのを見て喜びと、他も亦た己の難儀を爲てゐるのを見て喜びますから、他の難儀を爲てゐるのを見たならば、大に同情を寄せねばなりません。

一二九 蚊と獅子



或るところで蚊がブン／＼飛びながら獅子に向ひ  
 「ヤイ獅子め、汝は獸の王だなんか云つてゐるが、俺は少しも汝く  
 らゐなものには恐れはせぬぞ。汝たちの喧嘩してゐるのをは見ると  
 全然娘ツ子が喧嘩してゐるやうで、爪で引搔いたり、齒で噛付い  
 たり爲るより他、何の藝も無いぢやないか、俺は軀こそ小いが汝  
 より餘程強いんだぞ、若し嘘と思ふならサア決闘を爲て見ろ。」  
 と云ひますと、これを聞いた獅子は大いに怒り  
 「何を小癩な蚊め、サア願ひ通り決闘を爲てやるから來い。」  
 と云つて大きな聲で吼え出しました。そこで小くて身の軽い蚊は嘴  
 を尖らし、獅子の鼻の中や耳の中、又は顔の毛の無いところを散

ざんに刺しますと、獅子は愈よ猛り出し、蚊をば唯だ一撃で撲り殺  
 さうと、力を極めて撲り付け、我と我身を引搔いて傷を付け、遂う  
 閉口して引込んで了ひました。  
 蚊は獅子に勝つたと云ふので大いに威張り、意氣揚々として凱歌  
 をあげて歸つて行くのでありました。少し行きますと、蜘蛛の網  
 に懸つて、一生懸命に藻搔いたが少しの甲斐もなく、蜘蛛の爲めに喰  
 はれて了つたと云ふことであります。

△良い大將は、大敵を見て恐れず、小敵を見て侮りません。

## 一三〇

## 敵同士



敵同士の人が、或る時同じ船に乗り合しましたが、何方も傍にゐてはならぬと、一人は船の艦の方に居り、一人は舳の方に居つたのでありました。

愈よ船が港を出て、沖の方へ進んで来ますと、俄に颶風が吹いて来まして、今にも船が轉覆りさうになりますと艦に居る方が船頭に向ひまして

「船頭さん、何うやら船が沈みさうだが、若し沈むとすれば、艦の方が先か舳の方が先だらうか。」

と向ひますと船頭は  
「其の時になつて見ねば確としたことは判らぬが、私の考へではま

ア舳の方が先に沈むと思ひます。」  
と答へますと、艦に居る方は嬉しさうな顔を爲て

「さうですか、それならば私は死んでも少しも悲いことはありません。敵の死ぬのを見て居ることが能るからなア。」

と云つたと云ふことであります。  
△敵同士の心は、恐しいものであります。

一三二 犬と狐

四五匹の犬が、一枚の獅子の皮を奪合ひ、さも強さうに牙で散ざんに噛み裂いてゐますところへ、通り懸つた狐がこれを見て



『モシ犬君、君たちは其のやうに強さうに爲てゐるが、若し此の獅子が生てゐたならば、君たちの牙よりは、獅子の爪の方が遙に強いと云ふことが知れるんだがね。』

と云つて笑つたと云ふことであります。

一三二 驢馬と狼

或る驢馬が、牧場で草を食つて居りますと、向うから狼がのそのそと出て來ましたから、それと見た驢馬は心の中で『彼奴、俺を食はうと思つてゐるナ。可矣、一つ騙してやらう。』

と思ひましたものですから、いかにも痛さうに跛を引いてゐましたすると其處へ來た狼は

『やア驢馬君、何うして跛になつたんだね。』  
と尋ねますから驢馬は不自由な眞似をして

『これは狼さんでしたか、實は昨日生墻の中を潜り抜けました時、脚の裏に刺をさして困つて居ります、一寸御覽じて引抜いては下さるまいか。』

と云つて脚を出しますと、狼は盲く近寄ることが能ると心の中で壹び、近寄つて片脚を持ち上げ、蹄の裏を覗き込みました、驢馬は茲かと心に思ひ、力一杯狼の顔をば蹴り飛ばし、ひるむところを續



けさまに蹴とばして急いで何處ともなく逃げて行きました。其の時  
狼は歎息を吐き

『嗚呼、恁麼目に逢ふのも當然だ。巳の父親は巳に醫師のことは教  
えて呉れなかつたのに、醫師の眞似なんかするものだから。』  
と後悔を爲たと云ふことであります。

△自分の職業より他のことを爲ると此の通りであります。

一三三三

乘馬と厩

ある乘馬が追々年が老つたものですから、戦の役に立ちませ  
んで、磨舎の中に住んで、毎日粉を挽く臼をば廻してゐました、矢石

の中を潜り抜ける危険さは無くなりましたが、毎日同じことばかり  
照つても降つても續けてゐるのですから、これも随分樂な仕事であ  
りませぬゆゑ、以前仕合せの好かつたことを思ひ出し、とぼくと  
臼を挽きながら主人に向ひ

『旦那様、儂は以前乘馬でありました時、胸から尾まで美しい立派  
な馬具を着飾り、馬丁一人付き切りで戦に出て、大層働らさま  
したが、不斗氣が變つて、戦に出るよりは磨舎業に雇はれる方が  
宜いと云ふ氣になつたのは何うした理由でせう。』

と申しますると、主人は  
『さう云ふ昔のことを思ひ出して、愚痴を云ふのは廢しなさい。運



と云ふものは、良くなつたり悪くなつたりするのが世の中の常であるよ。』

と云つてきかせました。

△雇人などが、仕合せが良くなるやうにと、度々住替をする者がありますけれども、其の人は住替をする度に悪い運の方へ進んでゐるのであります。

### 一三四 猫と鷺と女野猪

或る鷺が、い煙の木のの上に巢を構へて居りますと、或る猫が其の幹のところにある穴に棲んで、小猫を養つて居りました、又た其の

根の所には大きな洞がありまして、其處には女野猪が住んで居りました。ところが猫は、自分の慧恵で鷺や女野猪を騙し、此處らあたりの食物を、自分獨りの物に爲やうと思ひ立ちました。そこで或る日鷺の巢に行き

『ちよいと鷺さん、御同様に永らく一本の木に住んで居りましたが今に危険な目に逢ひますよ。貴女も御承知の通り、此の木の根の洞に棲んでゐる女猪子は、毎日々々此の木の根を掘つて居ります。が、何の爲にするのかと探つて見ますと、彼あして此の木を倒し妾たちが落ちて來たところを捕殺して餌にするのだと云ふことでありますよ。』



と云つて十分に鷲を怖れさせ、それから又た女猪子のところへ参りまして

『女猪子さん飛んでも無いことが起りましたよ、實は一寸お知らせに来たのですが、此の上に棲んでゐる鷲は大層心の宜しく無いもので、お子達がぶら／＼餌などを拾ひに出られるところを、搔掠つて餌に爲やうと、間がな隙がな油断を見すましてゐるのでございますよ。妾も氣がゆるせませんから、早く歸つてなるだけ外へ出ぬやうに爲ませう。』

と云つて女猪子を騙して歸りました。而して晝の間は恐れたやうな様子を爲て、少しも外へ出ず、夜になるとこそ／＼と出て餌を拾

つて居りました。鷲も女野猪も猫の云ふたことを眞實と思ひ、晝も夜も少しも油断を爲ませんで、餌を拾ひに出ることさへも爲ませんでしたから、其處らにある食物は、皆猫ばかりで食ふことが能ますので、猫は獨で喜んでゐたが、鷲と女野猪とは、三四日の間も何も食まませんでしたから、遂う飢死を爲し、猫は食物が十分あるやうになつて、贅澤に暮したと云ふことであります。

△世の中にも、他を苛めて我身ばかり贅澤をする、無法な人が少くはありません。

## 一三五

## 蝦蟇の醫師



古くから池の中に棲んでゐた蝦蟇が、或る日池から出て、澤山の  
獸どもが集つてゐるところへ参り

「我輩は世界で並ぶものが無い上手な醫師である。薬の調へ方は元  
より、何事なる難しい病氣でも、一度我輩が診たならば、皆癒ら  
ぬと云ふ病氣は無い。諸君の中に病氣で苦しんでゐられる方があ  
るならば、少しも遠慮なく出て來給へ。」

と大聲で申しますと、或り狐が進んで出て

「これは蝦蟇大先生、なるほど貴方の仰有るところは眞實でありま  
せうが、貴方の跛の歩き方や、身體に出來てゐる其の皺を癒すこ  
とも出来ないで、よくも那麽法螺が吹けますね。」

と云つて笑つたと云ふことであります。

△人の中にも、此の蝦蟇のやうな、自分免許の人があります。

### 一三六 驢馬と蛙

或る驢馬が、材木を脊負ふて、小さな水溜の中を歩いて居りますと  
何うした拍子であつたか、蹉いて倒れました。何分にも脊中には重  
い大きな荷を負ふて居ることでありますから、起きられないで困つ  
て了ひ

「俺は茲で死ぬのか知らん、實に不幸福な身の上だなア。」  
と嘆いてゐますと、其處に住んでゐる蛙がこれを聞き



「驢馬さん、那麼に嘆くものではありませんよ。汝は唯だ水の中へ  
顛んだと云ふばかりで其のやうに大騒ぎをするなら、私どものや  
うに始終此の中に住んでゐたら、疾に死ぬ筈ぢやありませんか。」  
と云つて慰めたと云ふことであります。

△人は大きな不幸福に堪えることが能ても、小な不幸福を忍ぶこ  
とが能ないことが度々あります。

### 一三七 鳶と白鳥

鳶と白鳥とは、何分も美しい聲で歌を謡ふので仲間で名を得てゐ  
ましたが、或る日馬の嘶聲を聞き、何うした氣であつたか、それを

真似やうと思ひ立ち、頻りに稽古を爲てゐます中に、何時しか自分  
の歌を忘れて了つたと云ふことであります。

△將來の利益を思ふてゐるものは、何うやらすると、現在の利益  
までも失ふことがあります。

### 一三八 捕鳥漢と蝮蛇

或る捕鳥漢が藟竿を提げて、頻りと捕れさうな鳥をば探して居り  
ますと、幸ひにも偶ある木の枝に、小鳥が囀つて居りますから、こ  
れは旨いと藟竿を手頃に延し、無中になつて小鳥を目菟け、徐々と  
近寄りますと、思はずも足で蝮蛇を踏みましたから、蝮蛇は大いに



腹を立て、突如足を噛みましたから、捕鳥漢は堪らず、アツと云つて痛さに悶へながら

『嗚呼、俺は小鳥の生命を奪らうとして、反つて自分の生命を失はねばならなくなつた。』

と云つて悶へ死を爲ましたとサ。

△小さな利益に目が眩むと、大きな害を受けることがあります。

### 一三九 狼と獅子

或る狼が山の上に立つて吠ねてゐますと、やがて夕日になつた時に不斗自分の影を見ますと、大層大きな軀でありましたから、自分

で思ひますやうに

『俺は恁麼に大きな軀で、長さが一丁ばかりもありながら、何故彼の獅子が怖いのだらう。これだけの身を爲てゐたなら、獸の王にならなければならぬ筈だ。』

と思ひましたから、それから云ふものはズツと慢心を起し、油断

を爲てゐますところへ、不意に獅子が飛び出しまして、わけなく取殺しました。其の時狼は後悔をして

『俺は何と云ふ馬鹿だらう、益にも立たぬことを思つてゐたばかりに、生命を殞すやうな事になつて終まつた。』  
と嘆きましたと云ふことであります。



△慢心は身を滅す元であります。

一四〇 人と獅子

人と獅子とが連立つて旅行をして居りましたが、互ひに力自慢を初めまして、人が

「獅子より人間の方が何れだけ強いかわからないよ」と云ふと

「何有、人間なんかよりは獅子の方が強いに定つてゐる。」

と獅子が云つて、果しがありませなんだ時、折よくも路傍に勇者が

獅子を踏まへた石の像が立つてゐるのを見て、人が

「ソレ、此の通りだ。これでも未だ獅子が強いと云ひ張るなら何

か證據を出して見よ。」

と云ひますと、獅子は鬚をふりながら

「へん、それは人間の勝手な論と云ふものだ。全体此の石の像は誰

が建てたものだと思ふ、人間が建てたのだらう。若し獅子が石の

像を建てる法を知つてゐたならば、屹度人が獅子に踏み附けられ

てゐるところを拵へるに違ひないのだ。」

と云つたと云ふことであります。

△つまらぬ議論が通る時には、立派な議論は姿を見せませぬ。

一四一 驢馬の自慢



ある寺へ名高い佛の像を納めやうと、驢馬に脊負はせて、行列を  
して町を通りますと、途中で出會ふ人が皆手を合せて拜むのを見ま  
した驢馬は

『これは俺を拜むのだな。』

と思ひましたから、俄に鼻を高くして、容易く動かなくなりました

そこで圀夫は鞭をあげて尻を撲り

『エイこの畜生め、汝が豪くて人々が拜むのではなく、佛像が尊い

から拜むのだわい。』

と云はれて、驢馬は大きは當が異ひましたとサ。

△他人を尊ぶのを見て、自分が尊ばれてゐるのだと思ふのは、大

した馬鹿者であります。

一四二 偽孔雀

或る鳥が、古寺の屋根の上で遊んで居りますと、其の附近の花園  
に、諸種な家禽が澤山遊んでゐるのが見へます。而して中でも一羽  
の孔雀が、美しい羽を擴げて、我れこそは鳥の王である云ふやう  
な風を爲てゐるのを見た鳥は

『俺は此の通り眞黒で、我ながら愛憎が盡きるやうな醜い姿を爲て  
ゐるが、何うかして彼の孔雀のやうな翼が欲しいものだ。さうし  
て友達に見せたら、さぞや羨むことであらう。』



と思ひましたから、急いで花園へ翔けて行つて、孔雀の抜羽をば拾ひ、それを自分の羽翼の間に挿して、これ見よとばかりに威張つて歩いてゐますと、孔雀を始め他の家禽が、鳥の高慢な様子を見て大いに憎み、其の挿してゐる羽翼を抜き取つたばかりでなく、寄つて集つて嘴で啄き、到頭花園から追出しました。

鳥は仕方がありませんから、元の古寺の屋根へ歸り、又た以前の友達の仲間へ入らうと致しますと、古寺の鳥どもは、彼が他の鳥の羽を拾つてまで、自分を飾らうとした心を卑しめ、何うしても元の仲間へ入れて呉れませんので、今更ら後悔しても追ひ付かず、遂に唯一羽で、友もなく淋しく暮らさねばならぬことになりました。

△天から授かつた分限を守つたならば、何時までも幸福を受けることが能ますが、若し分限を忘れて不相應なことを爲ると、直に不幸福が回つて来るものであります。

一四三 犬と影

或る犬が、魚の骨を銜へて小川の橋を渡らうとして、不斗水の中を見ましたところが、水の中にも犬が骨を銜へてゐますから、自分の影であることは少しも知らず『旨いぞ、彼奴を一つ脅かして彼の骨も奪つてやらう。』と思ひましたから、大きな聲を出して



「ワン」

と吠ほねました拍子へうしに、自分じぶんの銜くはへてゐた骨ほねが水みづの中なかへ落おちましたので、初はじめて影かげであつたと知しつたが、何なんの役やくにも立たちませなんだ。

△餘あまり慾よく張ばると、反かへつて損そんをするものであります。

### 一四四 寡婦こふと牝鷄めんどり

ある寡婦こけが一羽いちばの牝鷄めんどりを飼かつてゐましたが、此この鷄どりは毎日まいにち卵たまごを一個ひとつづつ産うみますから、若もし二倍にばいがけの麥むぎを食たべたならば、日ひに二個ふたづつ産うむであらうと思おもひ、それから吝おしけ氣けもなく、澤山たくさんの餌えさを與やりました。すると鷄どりは丸々まるくと太ふとりましたが、肝腎かんじんの卵たまごは一個ひとつも産うま

なくなつたと云いふことでもあります。

△人ひとでも餘あまりに可か愛あいがり過すぎると、立派りっぱなものにはなりません。

### 一四五 老爺おやぢと蚤のみ

或ある蚤のみ嫌きらひな老爺おやぢがありました。一日あひひ脊中せなかへ手てを廻まわして、何なにか顔かほをしかめながら、ガリノノと搔かいて居ゐりました。するとやがてのことことに漸やうやく一匹いっぴきの蚤のみをば捕とらへ

「乃公おのこうの身體からだを恐おそれ氣けもなく無闇むやみに食くひながら、捕とらへる時ときには恚こん麻まに骨ほねを折をらせやがつた。」

と云いひながら、爪つめの先さきで殺ころさうとしますと、蚤のみは悲かなさうに



「旦那様、生命だけは何うかお許しになつて、潰さないで堪忍して下さいませ。僕は此の通り小な軀で、大した悪さはすることの出来ないものでございます。」

と申しますると、老爺は頭を振つて

「何を云ふのか、汝は乃公に害を爲たのに相違ないのだ。其の害が大きいか小さいかは云ふ限りで無い。」

と云つて、ブツリと潰して了ひました。

△巳を守る爲めには、些少の害をする者でも、許すことはできないのであります。

一四六 虜の喇叭守

或る國の戦争に、敵の爲めに喇叭守が虜に爲られますと、頻りに許されんことを願ひまして

「何うぞ私ばかりはお許下さいませ。全く私は今まで貴方の兵士を一人だつて殺したことはありません、御覽の通り手には唯だ一挺の喇叭を持つてゐるばかり刀とても持つては居りませぬ。」

と申しますると、敵は冷笑ひながら

「うれだから汝は早く殺さねばならぬのだ。汝は自分で戦ふ力も無い癖に、其の喇叭を吹き立て他と鼓舞ては教唆すのだ。何うして殺さずに置くものか。」



と云つて遂う殺して了ひました。

△他を教唆して悪いことをさせるものは、自分で手を下して悪い事をするものよりも、罪が深うございます。

一四七 吉天子と雛

或る麥畑の中に、告天子が雛を育ててゐましたが、母親が餌を捜しに出る時には何時でも

『留守の間にあつたことは、能く覚えてゐて、母が歸つて來たら直に知らせるのですよ。』  
と云つてきかせて置きました。すると或る日のことに、畑主が見廻

りに参りました。

『最う麥も能く實が入つた。近所のものを頼んで、刈入れねばなるまい。』と云つて歸りました。そこで母鳥が歸つて來ますと雛は『お母様、今日畑主が見廻りに來て、云々云つてゐましたから、早く何處かへ連れて去つて下さいませ。』

と申しますると、母鳥はそれを聞き

『なる程最う麥の刈入れ時だ。然し畑主が近所の者を頼むと云つてゐたならば、未だ暫くは間があるから急ぐことは無い。』

と云つて出て行きました。其の次の日も母鳥が出た後へ畑主が來て『麥の實の入り方は最早十分であるのに、未だ刈入れに懸らぬか、



近所の者には此の分ちや任して置かれぬ、親類のものを頼んで懸りて刈らねばならない。」

と云ひながら、向うの方に仕事を爲てゐる息子呼びかけ

「オイ、従兄の鈍助や伯父の拔作に、明日は来て麥の刈入れの手傳を頼むと云つて来い。」

と吩咐けて歸りました。それと引違ひに母鳥が歸りましたから、此のことを告げますと

「可矣よし、それちや未だ那麼に心配することは無い、彼の親類達も、自分の家の麥の刈入れに急がしいから、さう云つても直に來る氣遣ひは無い。今度又た畑主が來たときに云ふことな、よく聞

いて置きなさい。」と云ひきかしました。

又た其の翌日も、母鳥が留守の間に畑主が來て

「麥の穂が屈むほご重くなつたのに、誰も未だ刈つたものが無いが鈍助や拔作は何を爲てゐるのか、實に怪しからぬ者たちだ。」

と獨語を云つたが、今度は大きな聲で息子を呼び

「最う鈍助や拔作の來るのを待つて居ることは能ぬ。汝は誰でも可

いから今夜刈人を雇つて置け、明日は乃公も來て刈るから。」

と云つて歸りました。母鳥が歸つてから雛が此のことを話すと

「さうか、それぢやア今が巢立をする時である。」

と云つて雛を連れ、他へ移つたと云ふことでもあります。



△何でも他人に任せて置くやうでは事が運びませんから、世間の信用は無いものであります。

### 一四八 寡婦と綿羊

ある寡婦が、一頭の綿羊を養ふて居りましたが、なるべく澤山の毛を得りたいと思ひ、他に任せず、自分で皮にかゝるほど深く毛を剪みますと、綿羊は痛くて堪らず

「何故貴方はそんなに儂を苛めなさるのです、何も儂の血が毛の重みを増すものではありませんよ、若し貴方が儂の肉が御入用なら其のやうに捌殺しにせず、寧ろ一思ひに殺す屠羊者の手に懸けて下

さい。又た毛がお入用なのなら、血を出さずに毛を剪む剪丁にお頼み下さい。」と云ひました。

△生物識では、何時も不味い仕事しか出来ません。

### 一四九 狼と羊

ある時狼が、羊のところへ使者をやり

「何時までもお互に敵のやうに思ふて居りましたところで、これと云ふ益もありません、僕達が思ひますには、君のところには犬と云ふ番付が居つて、無闇と吠え付いて悪口を云ふものですからそれで自然と仲が宜くなくなるのです。これから仲よく暮さうと



思はれるならば、早く彼の犬を追ひ出して下さいませ。』  
と申しますると羊は狼の計畧とは知らず

『宜しい、それでは番犬をやめて友達になりませう。』  
と云つて犬を追ひましたが、其の後狼は、羊を守る犬の居ないのを  
幸ひとして、其の牧場の羊を皆喰ひ殺しました。

△狡猾ものゝ言葉を信用してはなりません。

### 一五〇 河と海

或る時河と海との間に争ひができました、諸方の河々が寄合ひを  
して、海の方へ押寄せて参りまして相談の末

『オイ海君、僕らは何時でも旨い真水を君のところへ送るのに、君  
は直にそれを鹹くして益に立たないものにするが、それは一体何  
う云ふ考へであるのだね。』

と責めますと、海はからくくと笑ひ

『汝たちは水が鹹くされるのが否だと思ふなら、遠慮なく他所へお  
やんなさい。何も此方から来て呉れと云ふのでないから。』  
と云つたと云ふことであります。

△他の世話になつて世を送るものは、何事も自分の希望通りにゆ  
かぬものですから、多少堪忍せねばなりません。



伊蘇普物語

伊蘇普物語 終



明治四十三年十月三日印刷  
明治四十三年十月十七日發行

不許複製

伊蘇普物語

編輯者 中川柳涯

東京市下谷區徒町一丁目十番地

發行者 菅谷與吉

東京市神田區松住町五番地

印刷者 菅井十一郎

東京市神田區松住町五番地

印刷所 碓文社

發行所

東京市下谷區徒町一丁目十番地

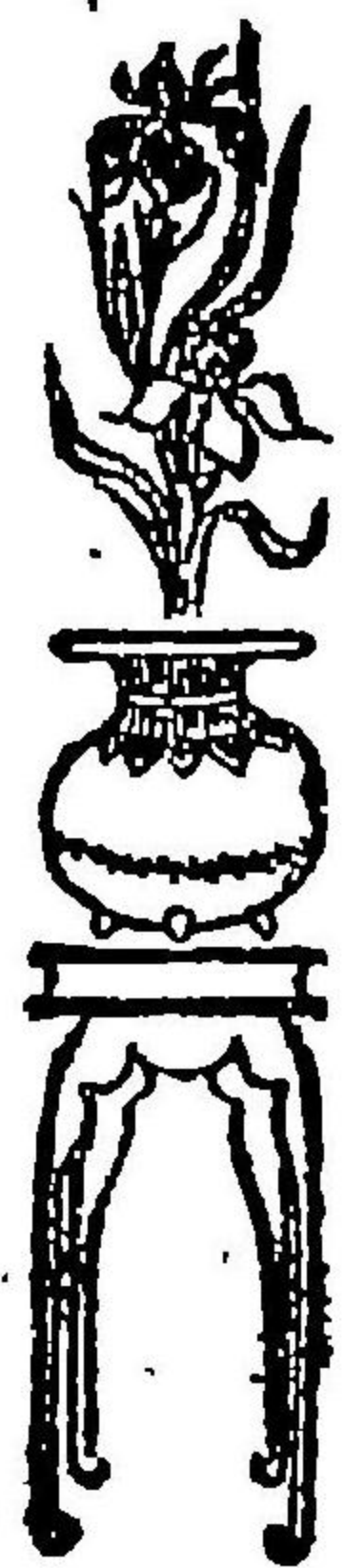
日吉堂本店

定價金參拾錢◎郵稅金六錢



伊蘇普物語

終



明治四十三年十月三日印刷  
明治四十三年十月十七日發行

不許複製

伊蘇普物語

編輯者 中川柳涯

東京市下谷區徒町一丁目十番地

發行者 菅谷與吉

東京市神田區松住町五番地

印刷者 菅井十一郎

東京市神田區松住町五番地

印刷所 碓文社

發行所

東京市下谷區徒町一丁目十番地

日吉堂本店

定價金參拾錢◎郵稅金六錢



# ポケット立志編

定價金 參拾錢  
郵税金 六錢  
クロス装釘 頗美本

天は自ら助くる者を助くとは、これ千古變ゆべからざる金言也。  
吾人は此の**ス** **自助論** が如何に世を益し、人を指導したるか  
**マイルス**の **自助論** を贅言せざるべし。本書は彼の自助論  
を極めて平易に譯したるものにして、向上發展の氣に満ち、一讀  
儒夫をも立たしむるものあり。必らず一讀せざるべからざる良書  
とす。

東京市下谷區從町一丁目十番地

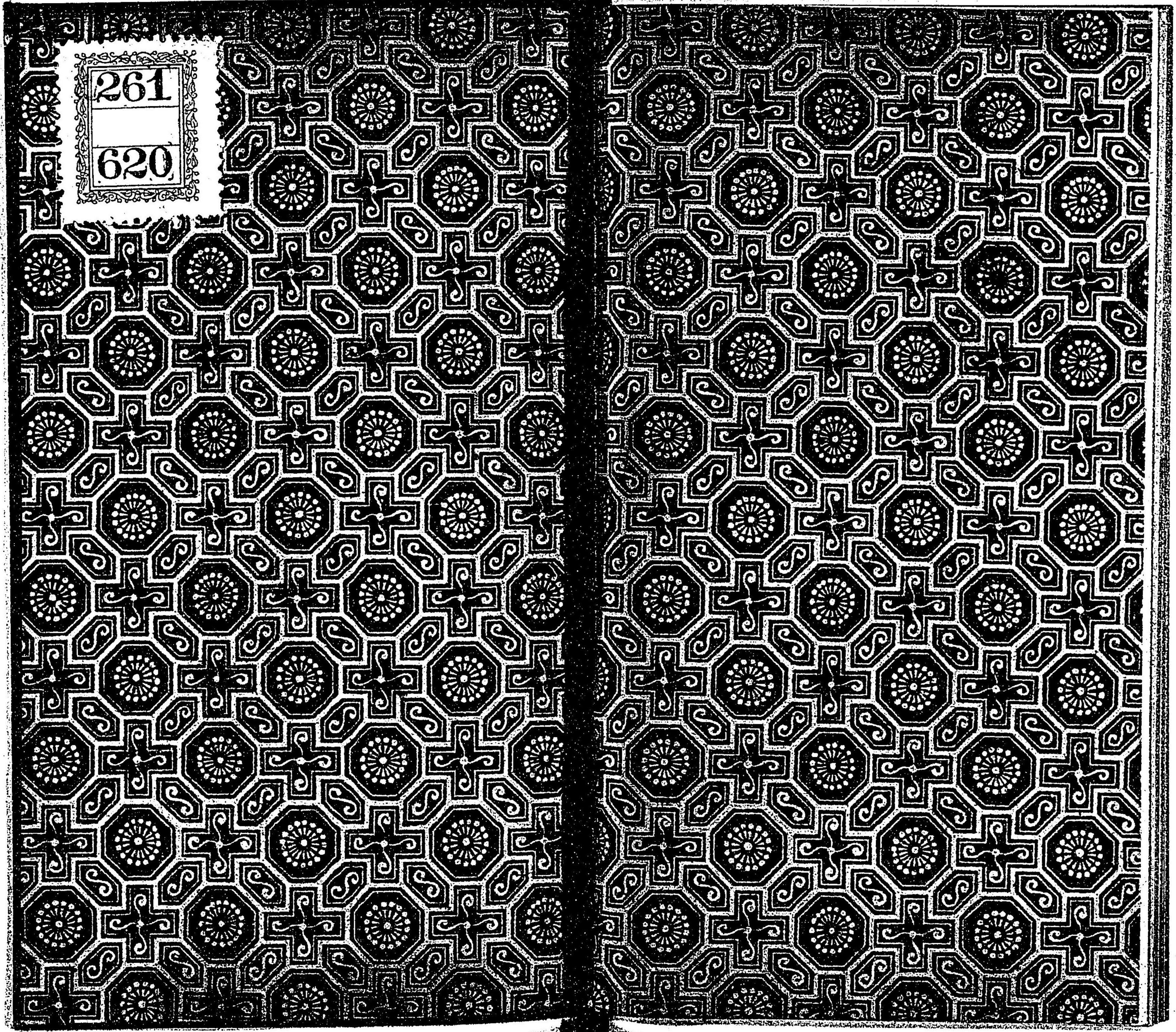
發行所

菅谷日吉堂

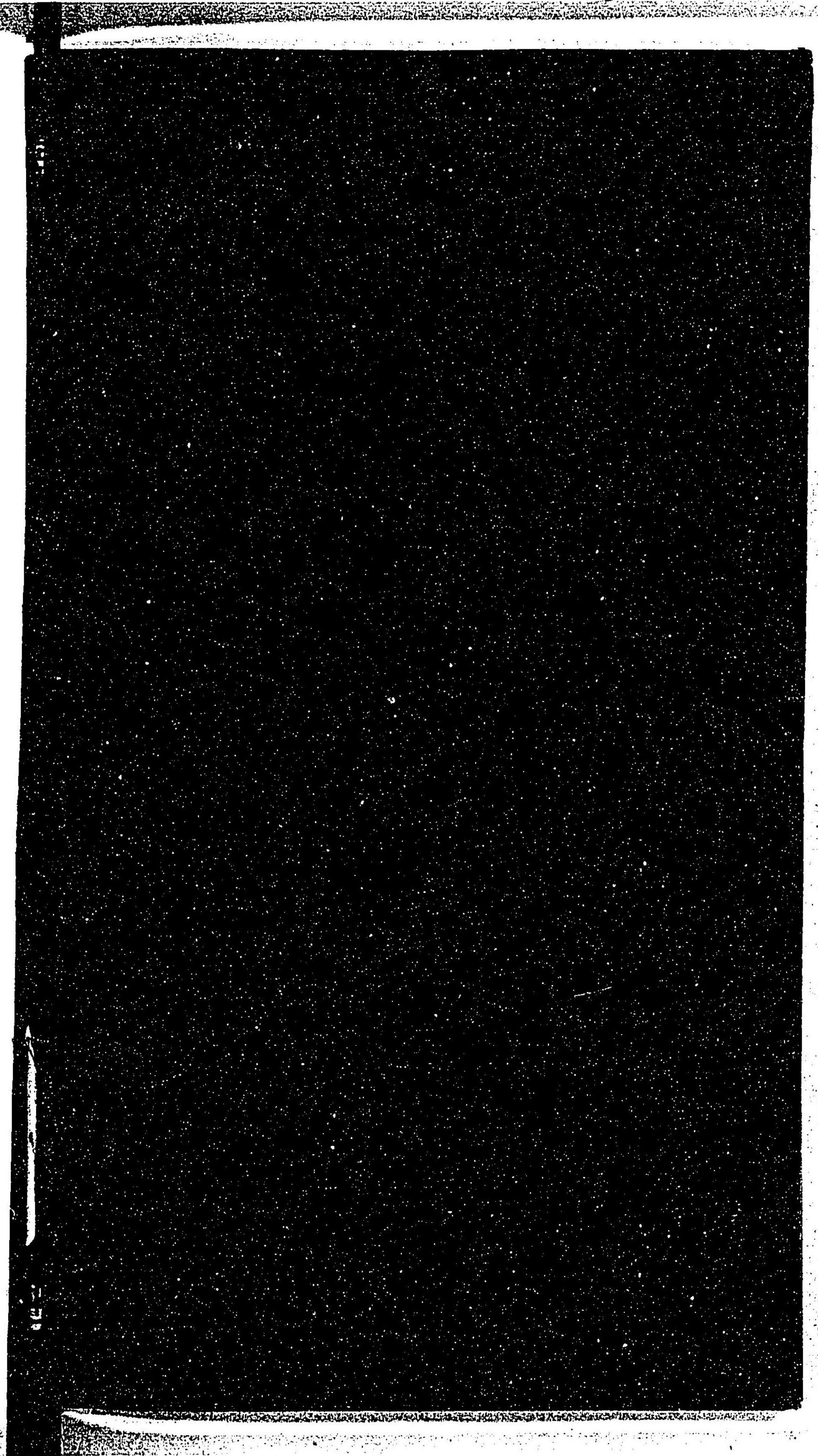


261

620









特65  
134

261  
620

100817-000-1

特65-134

伊蘇普物語 (ポケット)

中川 柳涯 / 編

M43

DBY-0061

